

4-4

災害対応力を育てる

避難行動を想定・試行する

(5) DECOにおけるICT及びSNSの役割 - DECOにおけるICT・SNS使用マニュアル¹ -

沖田 翔

はじめに

「知識・情報は命を救う」、これは平野・住吉で行ったDECOにおいて、ICT及びSNSを活用する際に込めたメッセージです。知識・情報を得ることは当たり前前の現代において、この言葉を意識する機会はほぼありません。ただ、有事の際には強烈に肌で感じる言葉です。本章では、DECOにおけるICTやSNSなどの活用についての意義と解説をまとめます。「知識・情報」で「命を救う」ためのスキルや考え方を身につけ、実践できるようになりましょう。

理論編：DECOにおけるICT及びSNS

有事の際、命を守るためには適切な知識・情報を取捨選択し、適切な判断に導けるかが重要となります。裏を返せば、適切な情報発信により、「人の命を救う」ことができるのです。DECOでは、仲間や地図と同様に、ICTは「命を救う」強力なパートナーとなるのです。

1)なぜICTを使うのか

参加者となる若い世代はICT機器に慣れ親しんでいます。1990年代後半以降生まれの世代は、生まれながらにしてデジタルに触れているデジタルネイティブス²とも呼ばれ、20代は約94%が、10代は68%がス

マートフォンを持っているとされます³。つまり、彼ら若い世代の共通のツールとしてICT機器が存在しているのです。その証拠に、DECOでは各班にiPadを配布しますが、一切使用に関する説明は行っておりません⁴。ただ、ICTスキルを高めることをDECOの目的のひとつとしています。



iPadを説明なしで使用している様子

1. DECO平野・住吉においては、iPadと4つのアプリ(①ブラウザ、②カメラ、③Twitter、④地図)を主に使用した。2. Digital Natives. Marc Prensky(米1946年3月15日〜)が定義した、世代の概念。3. 「平成26年(2014年)の情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査の結果」(総務省、平成27年5月)P73から抜粋。4. 平野・住吉においてはiPadを各班に2〜3台配布し、SNSとしてTwitterを使用。

2)2つのメリットと3つの機能

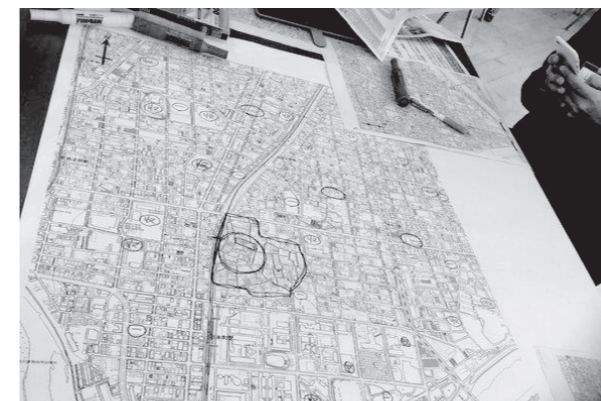
若い世代がICT機器に慣れ親しんでいるほかに、ICTを利用することの大きなメリットがあります。それは「ラクで簡単」ということです。なにが「ラクで簡単」なのかというと、「調べる」、「記録する」、「発信する」という3機能です。この3機能について、「大阪でファーストエイドの講習会に参加する」ためのフローを例に解説します。

表1:「大阪でファーストエイドの講習会に参加しようと思ったら」

	ICTを使う場合	ICTを使わない場合
調べる	Googleを使い、「ファーストエイド 講習会 大阪」で検索	地元の消防署や役所の掲示板と見る町内の回覧板で情報を集める人に聞く(口コミ)
記録する	写真をとる ブックマークする 印刷する	メモを取る
発信する	TwitterやFacebookで投稿する	講習会の参加者アンケートに記入 新聞に寄稿

特に発信することに関してはICTを使うことが「ラクで簡単」なのが実感としてわかるかと思います。また、上記のフローにおいて、前段階のものを踏襲しやすいというのはもちろん、他者が調べ、記録し、発信した内容を「ラクで簡単」に共有できるのも魅力のひとつといえます。

ただ、ここで注意すべきはICTを過信しないということです。非デジタルのものを使う方が「ラクで簡単」な場合もあります。そのためDECOでは紙地図や実演・実技を行うことも多いのです。必要がなければ、無理にタブレット端末を使用する必要はないということなのです。



デジタル地図ではなく紙地図を使っている様子

3)4つのアプリ

DECOのタブレット端末基本セットともいえるアプリは、①ブラウザ、②カメラ、③Twitter、④地図アプリの4つです。使用する端末には必ず用意しておいてください。前述の「3機能」をタブレット端末に備えるために必要なアプリです。

表2:アプリ毎の3機能使用例(一部)

	調べる機能	記録する機能	発信する機能
ブラウザ	検索エンジンで検索	カメラと連携して	Twitterと連携して
カメラ	撮った写真や動画を確認	写真や動画で記録	Twitterと連携して
Twitter	過去の投稿や他者の投稿を検索・確認	必要な情報を投稿	必要な情報を投稿
地図	場所や道を確認	ポイントやメモを入力	Twitterと連携して

特にSNSは情報発信をする機能に注目されがちですが、実際には3機能すべてを持ち合わせています。FacebookやTwitterで友人の投稿を遡ったりしたことはありませんか?自分の行動や思ったことを文章や写真で投稿したことはありませんか?実は調べる機能と記録する機能を意識せずに使っているのです。

DECOにおけるSNSの役割

前述の通り、ICT機器を使うメリットと関係する3機能を持ち合わせたものがSNSです。特にSNSは情報発信の機能に優れています。ここでは、発信をする前に必要な知識と、どのように情報発信するかについて実際に使用したTwitterの投稿を確認しながら、説明していきたいと思います。

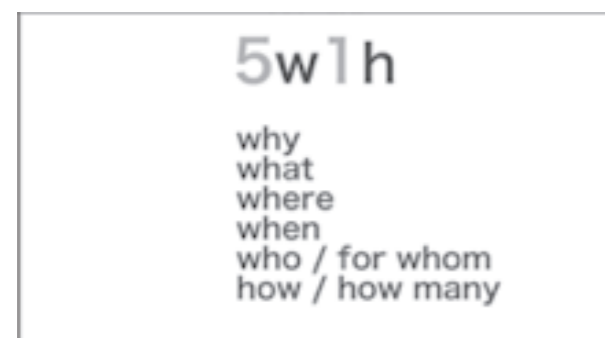
1) 情報のもつ「いみ」を考える

そもそも「いみ」とは何なのでしょう。日本語における「いみ」と呼ばれる言葉には、2つの捉え方があります。Meaning(意味)とValue(価値)です。羊を例に見ていきましょう。

我々がおそらく最初に想像するのは、「ウシ目ウシ科ヤギ亜科のふわふわの動物」である普遍的な羊です。これはMeaning(意味)にあたります。この羊という動物ですが、場所や文化、時代によっては「通貨」や「食料」、または「神の使い」にもなります。この異なる役割が羊のもつValue(価値)なのです。

ここで重要なのは、情報にもこの考え方が当てはまるということです。普段の生活ではあまり役に立たないとされる情報でも、災害時にはValue、つまり価値を持つことがあるのです。例えば、火災が起きやすい地域の情報は普段の生活において価値をほとんど持っていないといえますが、地震が起こり避難所へ向かう際には安全な経路選択のために、その情報は価値のあるものになります。価値のある情報にするためには、誰がどの場面でどのような情報が必要になるかを考える必要があります。ただ、複雑に考える必要はなく、下記画像のようなポイントのうちいくつかを押さえていけば良いでしょう。

価値のある情報を発信できるようになれば、有事の際に「命を救う」ことができるようになり、また普段の生活においても情報をまとめる力や発信する力が向上するといえます。



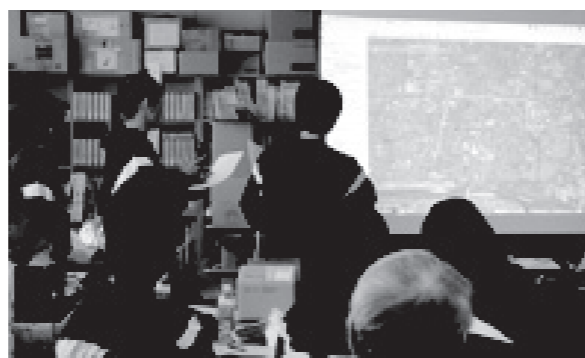
価値のある情報を発信するポイント

2) なぜTwitterを使うのか

DECO平野・住吉では、参加者が多くの情報をTwitterにて発信しました。DECOにおけるTwitterの活用は、情報の記録と発信をすると同時に、学校教育とは異なる学びを得ることができます。一般的な授業では、学んだこと・理解したことをノートにまとめていきます。そして、そのノートを個人で所有し、テスト前に見返したりします。つまり、誰にもノートを見せない＝自分自身が学んだこと・理解したことを共有しない、と

いうことです。

しかし、Twitterに学んだこと・理解したことを投稿するという事は、授業中や授業後に隣席の生徒や他学年の生徒、さらには外部に発信・共有することです。学校の教室ではできない「学びの共有」ができるのです。さらに、投稿に対しコメントやリツイート⁶をすることもことで、意見交換の場も生まれます。



Twitterで投稿した内容を確認しながら発表する様子

5. Twitterにて、ハッシュタグ＃deco_oskで検索するとDECOの様子等が閲覧可能。／6. Twitterの機能のひとつ。ツイート(投稿)した内容を引用する。

実践編：DECO平野・DECO住吉

1) 1日目：事前学習

初日の事前学習では、検索と記録することが中心となります。有事の際に必要な知識や情報を吸収するフェーズであることから、様々な専門家から具体的な情報が与えられます。そのため、1回で理解することや記憶することが難しい内容も多々出てきます。そこで、写真や動画、音声などノートとは異なる形式で記録をとり、Twitterを通じて発信・共有します。

互いの不足している部分を補うこともできるため、通常の授業とは異なり全員でひとつのノートを作っていく形になっています。

ここで重要なのは、とにかく情報を発信することです。備忘録として、ToDo管理として、あとで質問することリストとして、前述の「価値のある情報を発信するポイント」のうち1つでも当てはまるものがあれば、発信する情報はどのようなものでも構いません。



生徒とチューター

7. チューターは教育の視点を持つ者が望ましく、可能であれば、生徒からみて話しやすいお兄さん・お姉さんと呼べる世代であればなお良い。



DIGの様子と作成した地図



ファーストエイドの座学と実技の様子

ただ、通常の授業とは異なる方法での記録方法のため、講義の受け方も適宜指導する必要があります。記録することに集中して学びが疎かになったり、講師の方に失礼がないようにしたり、気を配らなくてはなりません。そのために、各班1～2人のチューター⁷がついています。



生徒とチューター

7. チューターは教育の視点を持つ者が望ましく、可能であれば、生徒からみて話しやすいお兄さん・お姉さんと呼べる世代であればなお良い。

2) 2日目：DECOにおいて

2日目のDECOは、初日に学んだことを実践するフェーズです。発災想定の下、災害対策本部から出された要請を基に、実際の街で、学んだことや経験を頼りに、自分たちの判断で、任務完遂を目指します。そして、前日記録した内容や発信した内容から今必要となる情報を選択しなければなりません。安全な経路の選択もそのひとつです。そして、災害対策本部からの指令に対してのやり取りや情報収集と発信も行わなければなりません。まさにICTが得意とする3機能、そして、学んだこと全てをもってDECOに挑まなければなりません。

特に注意したいのは発信する情報が「誰のため」のものかを意識させることです。災害対策本部へ宛ててなのか、地域住民・災害弱者なのか、もしくは災害ボランティア向けなのか、そこを意識するだけで発信する情報の内容は変わっていくはずで、その上

で、場所と時間という情報を明確にすることも重要だと考えます。発災後、刻一刻と変わる状況の中、「どこで」「いつ」「なにが起こったのか」という情報は、命に関わる価値のある情報になり得るからです。



本部からの指令 (DECOアプリ)とやり取り

本部への報告や確認は、自分たちの状態と現場の様子を的確に伝えなければなりません。また、本部からの指令だけでは十分な情報だとは言えず、自分たちの意思と判断で、本部へ確認したり、現地で収集したりする必要があります。

これは大変難しいタスクのため、実際の災害現場でも混乱を招くことが多々あります。住吉のDECOにおいてもこの問題は起こりました。下記画像は、本部

への報告を行おうとした際ネットワーク障害が発生し、そのことを本部へ報告・確認するための投稿です。この情報だと、何を伝えたいのかはもちろん、現状問題となっていることやその地域の特性を本部で行うことは難しいといえます。『情報のもつ「いみ」』を理解した上で、さらにそのシチュエーションにあった情報を参加者の判断で発信しなければならないのです。



さいごに

知識・情報は命を救います。そこに必要な技術と考え方を身に付けることが、ICTやSNSの活用を通じて可能だと考えています。そのために、前提となる知識や理念を知ることが必要です。実際のプログラムにおいても、ただ使うのではなく、そこにどのような価値があるかを説明しなければなりません。知識・情報を得ることは当たり前の現代だからこそ、その利活用や発信について明確な視点を知ることで、有事の際の「命を救う」ことに繋がるのです。

8.より実践的なプログラムにするため、災害対策本部での情報集約に時間を要している状態を再現。指令が出た後も、本部への確認が必要となっている。